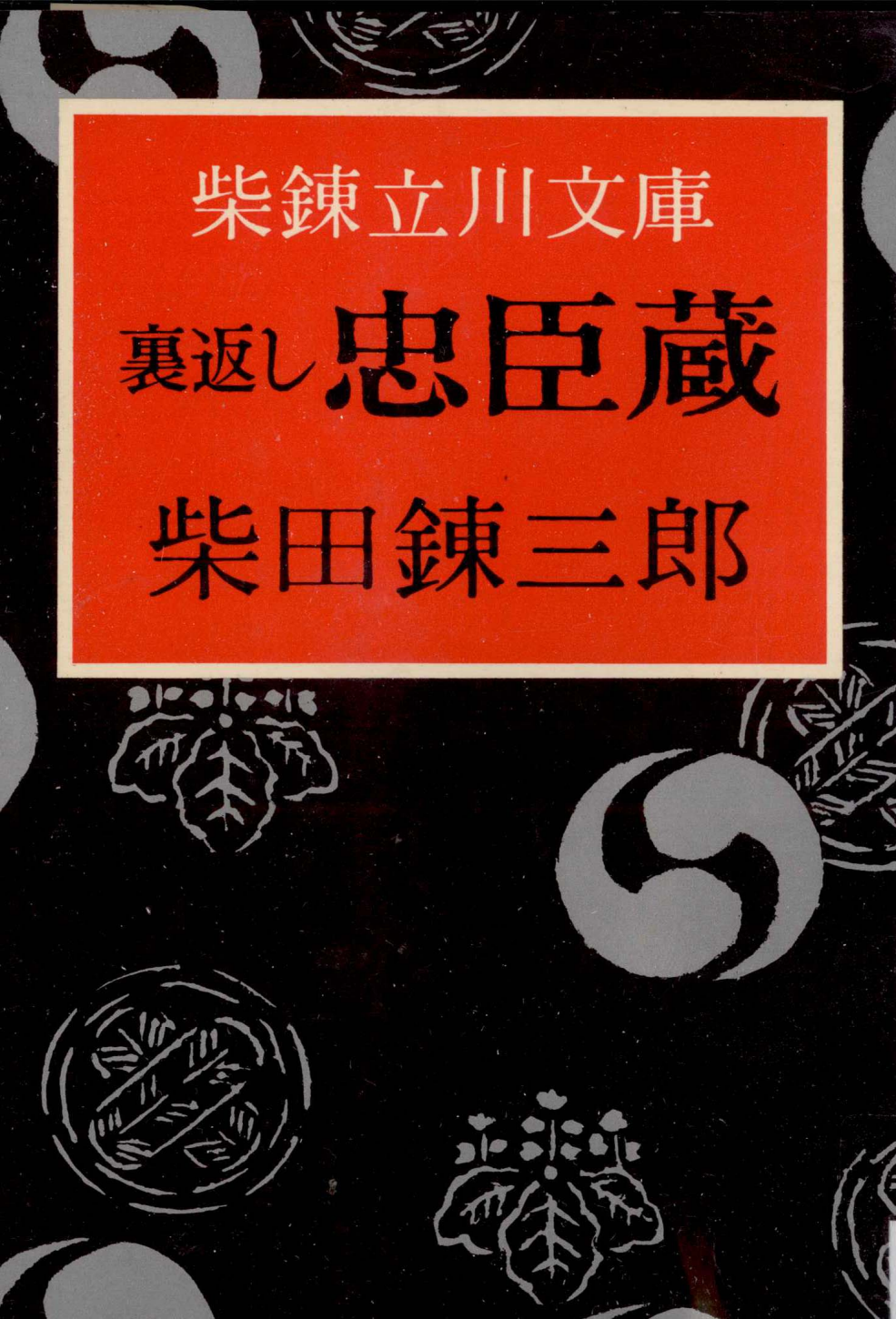


柴鍊立川文庫

裏返し 忠臣蔵

柴田鍊三郎



蔵

柴鍊立川文庫

柴田鍊三郎

文藝春秋刊

柴鍊立川文庫
裏返し忠臣蔵

鍊

昭和四十一年十二月二十日 第一刷

定価 三九〇円

著者

柴田鍊三郎
しばた れんざぶろう

発行者

上林 吾郎

発行所

株式會社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

©1966 Renzaburo Shibata

Printed in Japan

目次

吉良上野介	五
浅野内匠頭	二七
大石内蔵助	四九
堀部安兵衛	六九
松の廊下	九一
お軽勘平	一一三
高田郡兵衛	一三五
大石主税	一五七
千坂兵部	一七九
討入	二〇一
切腹	二二三
高輪泉岳寺	二四三

装帧
三井
永一

裏返し
忠臣蔵

柴錬立川文庫

吉良上野介

一

明暦三年嚴冬のことであつた。

吉良左近は、自分の居室に、早朝からとじこもつて、机に向つていた。

一冊の古びた漢書を、和文になおすことに、われを忘れていたのである。

それは、軍略や修養には、全く無関係な書物であつた。左近が、はじめて接する古書であつた。

一昨日、年があらたまるのを待つて、十五歳をもつて元服した左近は、登城して、將軍家に謁し、

吉良家の家督を相続した旨を奏上した。

左近は、元服すれば、正月に上洛して、禁中より、従四位下に叙せられ、侍従兼上野介に任ずる沙

汰がある身であつた。

表高家である吉良家を嗣ぐのであつたから、一躍して、四位の少将に叙せられるのは、べつに異例

ではないが、左近は、その官位にふさわしい稀有の秀才であった。

先年——承応二年春に、左近は、十三歳にして、はじめて、將軍家に謁見したが、その時、すでに、秀才の噂は、江戸城内にもひびいていた。

四代將軍家綱は、左近と同年であつたので、大老酒井雅樂頭忠清が、幕臣の子弟の中から、左近をえらんで、学友にしたのである。

家綱は、父家光とちがつて、温和柔弱の性情の持主で、自分から積極的に、指図をすることはなく、ただ、万事を大老酒井忠清にまかせて、ただ、

「左様いたせ」

と、云うばかりであつた。

世間では、公方様と呼ぼずに、「左様せい様」と称していた。

このように凡庸な將軍家にとって、稀有の秀才を学友にすることは、甚だ迷惑なことであつたに相違ない。

始祖家康の定めたならわしにしたがつて、將軍家は、一日のうち午前中は、学者や僧侶の講筵に、出座しなければならなかつた。

経籍性理の義理を講明したり、和漢史伝の故実を説いたりすることが、聞き手にとって面白い筈がなかつた。就中、程朱学の論議など、砂を嚙んでいるようなつまらなさであつた。

家綱は、この日課のおかげで、いつの間にか、眸子をひらいて、居眠りをするわざを身につけたくらいである。講義が終つた時、しげんに、目をさまして、

「ご苦労であつた」

と、声をかけて、座を立つので、誰人にも気がつかれなかった。

ただ、下座にかしこまっている左近だけが、その居睡りを知っていた。家綱が、正直に左近に打明けて、一冊の書物の講義がおわると、

「つまり、一言で申せば、どういうことが書いてあるのだ？」

と、問うたからである。

左近は、そのたびに、凡庸な頭脳にも判りやすいように、講義のやり直しをした。したがって、左近自身は、学者や僧侶の論議は、一語ももらさずに、耳をかたむけていなければならなかった。

左近は、そのために、この二年間で、さらに、おそるべき博学になっていた。

さて――。

昨日、元服の奏上のあとで、家綱は、左近を、ともなつて、中奥の居間に入り、

「たのみがある」

と、云つて、一冊の古びた漢書を、抛ったのであった。

「わしは、頭が悪うて、いまだに漢文が読めぬ。これは、茶坊主の一人から、ひそかに、もううたものじゃが、むつかしゅうて、何を書いてあるのか、一向に判らぬ。左近、そちが、和文になおしてくれぬか？」

左近は、手に把つてみた。

『脩真演義』

漢の元豊三年、巫医の咸なる人物が、武帝にたてまつった、男女接触の方法を順序次第に述べた、いわば閨房の術書であった。

「かしこまりました。すぐに、和文になおして参ります」

左近自身にも、興味があつた。左近はまだ童貞であつた。

左近は、わが家に戻ると、早速に読みはじめ、ついに、深更にいたつた。

そして、今朝は、早くから、和文になおす作業にとりかかったのである。

『……およそ、交合せんと欲すれば、まず自ら神を凝らし、性を定かにすべし。女人を抱挂し温存す。彼の唇口を啣い、彼の双乳を撚り、女をして玉茎を弄せしめ、他の心を動かさしむ。後手をもつて陰戸を探るに、微しく滑津あり。まさに交合すべし。炉に入るには、法によるべし。緩かに、功を施すべし。女は、必ず暢快なり、まず敗る』

左近は、ただ和文になおただけでは、家綱にまだ判らぬ、と思い、さらに、それに訳をつけていた。

たとえば、『女人を抱挂し温存す』とあるのは、女を抱えて、やさしく甘い言葉をかけて、その心をなぐさめる、という意味であらう、と訳した。

尤も、左近自身にも、なんのことやら、解しがたい箇所もあつた。

『上を紅蓮峰といい、王泉と名づく。また玉液という。中を双薺峰という。薬を蟠桃と名づく。白雪といい、また瓊醬という。女人の乳中にあり。下を紫芝峰という。号して、虎洞という。また玄関ともいう。薬を黒鉛と名づく。女人の陰宮にあり』

こういう文章は、実際に、女体をくまなく調べて、もてあそんでみなければ、合点のいくわけが

ない。

『下を紫芝峰という』

というのは、たぶん、女陰を指すのであろう。

『その関、常に閉じて開かず。およそ姦合かんごうの会に、女情託媚ななひすれば、面赤く、声ふるえ、その関はじめて開き、気をすなわち泄もちし、津すなわち溢る』

とつづいているが、童貞の身のかなしさで、想像しただけでは、どういう状態なのか、見当がつかぬ。

將軍家綱は、すでに、大奥で、女子を抱いているから、読めば、すぐに、合点がいくに相違ない。左近は、はじめて、家綱に対して、嫉妬しとと羨望せんぼうをおぼえた。

二

「若様——」

廊下で、乳母多津の声に、呼びかけられて、左近は、あわてて、古書を閉じ、訳を書いた料紙を、机の抽斗ひきだにしまった。

「お父上が、お呼びでございます」

「いま、参る」

左近は、障子を開けて、廊下へ出た。

「ずいふんと、ご熱心にご勉強遊ばしておいででございますこと。いったい、なにを……？」

多津に訊ねられて、左近は、懺然として、

「そなたの知ったことではない」

と、はねつけておいて、さっさと、歩き出した。

幼くして母を喪った左近は、多津によって育てられた。

左近のことなら、なんでも知っている、という顔をしている多津の存在が、近頃では、いささか、わずらわしくなっている。

吉良若狭守義冬は、庭の見渡せる座敷に、高く積んだ夜具に凭りかかって、やすんでいた。

二年前から、胸に癰ができて、以来ずっと牀に就いたきりであった。

表高家筆頭である吉良義冬は、その父義隲の時代よりも、さらに、江戸城内では、重きをなして、諸侯をその下風に立たせることに成功した人物であった。

元来、高家というのは、もっぱら京都の宮廷との交渉にあたり、諸儀式、典礼のことを管掌する役であった。その称呼は、足利末期にはじまり、はじめは公家と書いたが、公卿と混同するおそれがあるので、高家と唱え変えたのである。

吉良家は、足利將軍の門葉であり、渋谷、石橋両家とともに、下馬衆と称された名門であった。下馬衆と称されたのは、いかなる大名でも、路上で出会った際、下馬の礼をとらねばならなかったからである。

足利末期から、次第に微祿した吉良家も、その名門意識に於ては、戦国武将をはるかに見下していた。

徳川の天下になって吉良家は、將軍家より高家と定められ、再び左近衛権少将にかえり咲くや、そ

の名門意識は、さらに高いものになった。

高家は、江戸城内では、無役で、年首、歳末、五節などに登城すればよかったが、幕府の施政方針が、典礼きんれい規式きしきのきびしい実行を最も重要視したので、大名たちは、それを守るのにいそがしく、どうしても指南役を必要としたため、毎日登城することになった。

したがって、高家は、大名衆から、乞われて教授するたびに、莫大もくだいな謝礼をもらった。しかも、官位は、大名の上に在あったので、音物いんものを贈られても、常に頭づを高くしていた。

のみならず、吉良義冬は、祖母が、家康の大叔母にあたる縁故もあって、小祿、小権にも拘かわらず、江戸城内で、高家という存在を、いやが上にも重いものにしたのであった。

それだけに、識見もあり、器量も大きかった。

その義冬も、病氣には克かてなかった。

義冬は、死期を迎えたことを知っていた。

「お呼びでございますか」

入って来た息子へ、義冬は、冷たい眼眸まなこをくれた。

「左近、そちは、今日まで、一度も、兵法道場へかよったことはなかったな？」

「はい。高家に、兵法は無用と存じました。そのかわり、兵法修業の時間を、書物をひもとくことに当てました」

「わし自身も、今日まで、そちと同じ意見であったゆえ、敢あえてそちに兵法修業をさせようとはせなんだが……、高家もまた幕臣である以上は、太刀たちの振りかたぐらひは、おぼえておく必要がある。そのことが、今日、わかった」

「何事か、起りましたか、父上？」

「起ったの」

「その病臥のおん身で、太刀など把れましようか」

「たわけ——。太刀を把らねばならぬのは、そちだ」

「え——？」

左近は、眉宇をひそめた。

義冬は、かたわらに置いた文函から、一通の封状を把ると、左近の膝へ投げた。

「読んでみるがよい」

「はい——」

左近は、手紙を抜いてみた。

果し合い誓願之儀

まず、はじめに、そう断り書きがしてあった。

『一筆啓上仕候、今度身共儀、御当家嫡男左近殿に對して、武辺の一義やみ難き事これあり、果し合いをもつて、武士道の吟味と致さんと決意仕候得共、御当家は高家に候えば、利刀を振つて武士の面目を樹てる作法をご存じなきや、と考えられ候、依つて、左近殿に直接果し状を送りつけ申さば、あるいは、握りつぶされる懸念これあり、と存じ、父君たる若狭守殿に、斯状を奉る所以に御座候、たとえ高家の作法が公家流にて、武勇を卻け、懦弱を尚ぶを心掛となさるとも、

形にもせよ、平常腰に二刀をたばきむ上からには、これを抜くすべを知らぬ、とは申されまじく、何卒父君より左近殿をはげまさされ、当方が挑戦にお応えこれあるべく、願い上げ候、もしそれがしの申し出を拒否されるに於ては、日本橋袂に、高札を立てて、その卑怯を喰い申すべく、お覚悟なさるべく候

一、日時おひる大晦日未明

一、場所ばくろ馬喰町馬場

追伸 左近殿には、兵法の心得これなき儀に候わば、助太刀勝手に御座候

ばんしゅう播州赤穂藩主あさの たくみのかみながなお浅野内匠頭長直

嫡子又一郎長友

三

義冬は、息子が読み了えるのを待って、

「浅野内匠頭の件から、私恨を買ったおぼえがあるか？」

と、訊ねた。

「あります。……然れど、あれしきのことで——」

左近は、面ていをすこし蒼ざめさせ乍ら、首をかしげた。

一昨日のことであつた。

江戸城内富士見櫓の文庫に隣接した学舎で、左近は、浅野又一郎と、かなり激烈な口論をした。

富士見櫓の文庫は、家康が設立したもので、ここには、日本中から搜索され、出版謄写された古書が蒐められていた。家康がこのことを為すまでは、孔子家語をはじめとする漢籍、古事記をはじめとする国書は、各家に秘藏され、就中国書類は世に知られていなかった。この時、家康が謄写させなければ、あるいは、埋滅し、散佚してしまつて、後世に残らなかったかも知れない。

三代家光にいたつて、この夥しい貴重書籍を、いたずらに、文庫内にねむらせておくのは如何か、という提議が閣老の間に交され、やがて、徳川家縁故の大名、旗本の子弟に限つて、閲覧を許すことになり、文庫の隣に、学舎が建てられたのであつた。

この学舎にまなぶことは、大名、旗本の子弟にとつて、榮譽となり、各家では、遠い家譜を調べてほんの微かな縁故をさがし出して、嗣子を入れようと腐心した。

家康の掎となつた浅野長晟を宗家とする浅野一族の一人である又一郎長友や、曾祖母に家康の大叔母を有つ吉良左近などは、碩学たちの警咳を、机ひとつへだててきく上席を与えられていた。

浅野長友と吉良左近は、後者が二歳上であつたが、その体格に於て、前者の方がはるかに年長にみえた。

又一郎長友は、学問よりも兵法に、その天稟を示し、柳生道場にかよつて、すでに、高弟に挑んで、三本に一本を取る、という噂であつた。

一昨日、講堂で、おのおの自習にふけている時、長友の隣の席の少年が、『孫子』を読んでいたが、